
172話 星に願いを

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

172話 星に願いを

【Nコード】

N9523U

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

毎年、七夕の夜には子どもたちの願い事を叶えるために、たくさんのかんぺいとうたちが短冊を手にお星さまのところへ届けています。

七夕の夜。いつもは静かな宇宙も、この夜だけは賑やかになる。
笹舟に乗ったちっこいこんぺいとうたちが短冊を手を列をなして、
何艘もの舟が天の川を行き来していた。

「おーい、おまえさんはどこまで？」

「僕の笹舟の短冊はキレイになりたい女の子が書いた願い事だから
金星まで行かなきゃ」

「俺は月までだから、今年はラクだな」

そんなやりとりをしているのは、短冊の配達に慣れたこんぺいと
うたちだ。

彼らはそれぞれの短冊の願い事によって異なる配達先の星まで天
の川を旅していく。

「これはどこのお星さまが叶えてくれる願い事でしょうか？」

今年、はじめて笹舟に乗るこんぺいとうのコンくんが、青いこん
ぺいとうの青ジイにたずねた。

青ジイはもう何年も短冊の配達をせずいぶん大きくなり、今回
で配達の役目を終えて青いお星さまになることができる。

「どんな願い事なのか、短冊を読んで届け先を教えてやろう」

手渡された短冊を見た青ジイの顔は、元の顔よりももっと青くな
った。

「どうしたのですか？」

不安になつて尋ねるコンくんに、青ジイは言った。

「よくお聞き。君にはまだこの願いは早すぎる。代わりにこの“友
だちがたくさんできますように”の短冊を持って火星に行きなさい」

コンくんが元の短冊の願いを叶えてあげたいと言うと、青ジイは「これはワシが叶えてあげるから安心しなさい」と言ってくれたので、喜んでお礼を言って火星に向け笹舟を漕ぎはじめた。

「さてと……」

コンくんを見送った青ジイは、受け取った短冊を握りしめる。

ある貧しい村で、幼い兄弟が空に広がる天の川を眺めていた。

「お星さまはお願い叶えてくれるかなあ」

「大丈夫だよ、きっと」

心配そうに振り返る2人の視線の先には、藁葺きの屋根はとつくと崩れ落ちて、雨が降ると家の中にも外と同じくらい雨が降り込む自分たちの家がある。

その中には、ずっと病気をこじらせている妹が寝ていた。

両親はなんとか妹を医者に診せようと必死で働き、兄弟も水しか飲めない日も多かったが、決して不満を言わずに親の仕事を手伝う毎日だった。

それでもわずかな畑しか分け与えられていない身ではその日暮らしていくのさえ精一杯だ。

妹は日に日に衰弱していく。何とか元気になってほしい。

幼い兄弟は一生懸命相談してそれぞれ違う願い事を書き、今日の7月7日、笹に短冊をつり下げた。

兄は「妹の病気が治りますように」そして弟は……。

コンくんから短冊を預かった青ジイはまっすぐ地球に向かい、貧しい村の一軒の家に到着した。

すると同時に赤いこんぺいとう、赤ジイもやって来た。

「やあ、お久しぶり」

「お久しぶりです。あなたも赤いお星さまになるようですね」

「いよいよ最後の役目ですよ」

「ワシもこれが最後の役目になります」

青ジイと赤ジイは初めて短冊に書かれた願いを叶えた頃からの親友で、おたがい星になる最後の役目の場所で出会えたことに微笑みあった。

「それではどちらから先に役目を果たしましょうか？」

「ワシの役目は赤さんの役目が終わってからでないと叶えられませんか？」

「それではお先に。青さんが来られるのを楽しみに待ってますよ」

そう言って赤ジイが家の中に入って行くと、中から幼い兄弟と両親の喜ぶ声が聞こえてきた。

「さてと……次はワシじゃな」

青ジイが家の中をのぞくと、元気になった妹と兄弟、両親が抱き合って喜んでいる。

その光景を見てニッコリ笑ったとたん、青ジイの体はバラバラに砕け散った。

「わあっ!？」

「何だコレは!？」

突然の出来事におどろいたのもつかの間、家族は歓声をあげた。

いつもは雨が降りこむ穴だらけの屋根から、色とりどりのこんぺいとうが降ってきたのだ。

「おいしい！ もう二度と食べられないと思ってたのに」

床に伏せながらずっと食べたいと言っていた妹が、一粒拾い口にして喜びの声をあげた。

食べ切れないほどのこんぺいとうは、兄弟たちと同じように食べ物がなくて苦しんでいた村人たちにも配られ、皆元気を取り戻した。残った大部分は町で売られて評判となり、手に入ったお金でたくさんのお金でたくさんのお金で新しい農具を買うことができ、貧しかった村は徐々に活気を取り戻しはじめた。

「今年また会えなかったのなら、青ジイはきっと青いお星さまになっただろうな」

去年、短冊を取りかえてもらったコンくんは、天の川の空に輝く星の中から新しい青い星を探したけれど、あまりに数が多くてどれが青ジイの星なのか見つけることができず残念に思いながら、今年の願いを叶えるため笹舟を漕ぎはじめる。

天の川の足もとには、去年よりもずっと美しさを増した青い星、地球が輝いていることに、コンくんはまだ気づいていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9523u/>

172話 星に願いを

2011年10月6日20時39分発行